

トマス・アクィナスの形而上學研究 (完)

— 合成實體の存在と本質について —

宮 地 宏

二

先の考察によつて、トマスの形而上學の根本的性格は明らかにされた。故にその出發點となる感性的實體、即ち合成實體 (*substantia composita*) に關するトマスの特色ある存在論の展開と諸問題とを、以上の基本的方向に留意しながら考察してみよう。

「論證の端緒は物の何たるかであるので、理性が或る事物について把握する知識全體の端緒は、その物の實體 (本質) を認識することである」^{註一}。故に第一に合成實體の本質について考察しなければならぬ。

扱、合成實體に於ては、實體的形相 (*forma substantialis*) と質料が見出されると同時に、實體以外の他の諸範疇 (*alia predicamenta*) が合成實體を基礎としてゐることが知られる。例へば「火」が質料と實體的形相とから成る合成實體であるやうに、實體と附帶有 (*accidens*) との或る合成があるわけである。故に、形相と質料とからの合成實體に或る定義があるであらうから、附帶有と基礎 (*subiectum*) とからの合成體 (これは後に *esse accidentale* と名付けられる) にもその本質の概念があるかどうか、換言すれば本質を言ひ表はす概念である所の定義を持つかどうかが探究されなければならない。例へば今「白人間」(*homo albus*) について考へてみる。所で、基礎の固有の

様態 (passio) と基體の本質は同じものでもなければ、一つのものでもなく^{註二}。即ち、我々が外的事物に對して、その物は何であるか (quid est?) を問ふ場合、何であるかといふ仕方でも物について出された問いに適當に答へられることが出来る事柄を我々は或物の本質によつて知るのであるが、此の場合、例へば事物について何であるかが問はれ、「白い物である」とか、「坐つてゐる」とか、「教養がある」とかといふやうに、附帶的に或物について述語される事柄は、その事物の本質に對する答とはならない。何故なら、教養の本質に屬する事柄は、その事物以外のものであり、「教養がある」といふ事はそれ自體に於てその事物に述語されるのではなく、附帶的に述語されるのであるから。従つて、「人間」とか、「動物」とか、「實體」とか、「理性的」とか、「感覺的」といつたやうに、それ自體に於て述語される事柄が、その事物の本質である。更に、基體の様態といふ仕方でもそれ自體に於て述語される事柄は、その基體の本質ではなす。例へば、「顔が白く」といふ場合、「顔」の本質は「白色」ではなす。「顔」の本質と「白色」の本質は異なるからである。又、「顔」の本質は「白く顔」ではなす。何故ならその本質を求めてゐる「顔」が、その本質の定義の中に含まれるからである。かくして本質とは、例へば、「動物」の定義の中に「人間」が含まれないやうに、その中にその當の物(の名稱)を含むことなしにそのものを言ひ表はしてゐる概念といふことになる。従つて、「白く人間」といふ言表の形式は、それが附帶的に (per accidens) 一つの物である事を表はしてゐるのであつて、それ自體に於て (per se) 一つの物である事を意味してはゐないのである。扱、一つのものが他のものと附帶的に一つになるといふ事は、「人間が白くある」(Homo est albus.)^{註五}といふ場合、即ち附加 (additio) による場合と、「白く物が人間である」(Album est homo.)^{註五}といふ場合、即ち附加によらぬ場合の二つの仕方が見出される。故に、「人間」の定義に於ては、「白」の定義、或ひは「白」の名稱が附加される必要はないが、「白い物」の定義に於ては若し「人間」がその固有の基體であるならば、「人間」又は「人間の定義」が、或ひは他の固有の基體が指定されなければならぬ。此のやうに、附帶的の定義に於ては基體が指定されなければならぬから、附帶有は完全な意味に

於ては本質を持たず、附帶有が述語される基體のみが完全な意味に於ける本質を持つと言はなければならない。故に本質は何か或る事物にのみあるのであつて、基體に附帶有が述語される場合、例へば、「人間が白くある」(Homo est albus.) と云ふ言表の形式は、「特定の或る事物」(hoc aliquid) を表はしてゐるのではなく、ただ或る事物が「どの様であるか」(quale) を表はしてゐるに過ぎないのである。特定の或る事物であるといふことは、獨り實體にのみ適合することである。故に、例へば、「白さとは何であるか」と問はれ、「色である」と答へるやうに、量や性質等の附帶有の範疇にも、或る意味で本質がありはするが、量や性質等の附帶有の範疇は、それが結合すべき基體を當然豫想するのであり、その故に、附帶有の範疇が、言表の形式から「何々である」と表現されても、その存在性は基體から得られたものであつて、附帶有の範疇の持つ本質は、その基體たるべき實體の性質や量の本質を示すに過ぎず、究極的な意味に於て *primum*)、且つ端的な意味に於ての (*simplificiter*) 本質を持つと言ふ事は出來ず、謂はば從屬的な (*secundum quid*)、若くは、此の、或ひは、彼の本質 (*quod quid erat esse huic vel illi*) を持つと言はなければならない。附帶有の範疇も、「色」とか「數」とかいふ風に、二次的な意味で本質を表はす概念を示す名稱を持つてはゐるが、その名稱の示す概念が直ちに一次的な意味での本質であるといふ事は出來ず、^{註六}「本質は如何なる概念にせよ、名稱が表はす概念を持つ如何なる事物にでもあるのではなく、(その名稱が表はす) 概念が定義であるものにのみあるのである」^{註七}。

以上の考察によつて、我々が實體の形相と質料とから成る合成實體と同じやうに、基體と附帶有とから成る合成體の本質を求めようとしたのは誤りであるか、少くとも嚴密性を缺くことであつたと言ふことが出来る。しかしながら我々が現實に外界に對するとき、そこに見出す感性的合成實體は、例へば、「顔の色は白く、脊は高く、教養のある人」といふやうに、多くの附帶有を備へた具體的全體である。しかもなほかゝる合成體に於て、端的な意味に於ける本質があるといふことが出來ないのは何故であらうか。此處に於て我々は此の様な合成體について、更に一步考察

を進めなければならぬ。

トマスは、實體的形相と質料とから成る合成實體と、基體と附帶有とから成る合成體とを明瞭に區別して考へてゐる。^{註八}即ち、附帶有は基體から獨立した自らによる存在を持たず (non habent esse per se absolutum a subiecto)、附帶有が基體に加はつて來た場合には、附帶有と基體とから附帶的存在 (esse accidentale) が結果するのである。これに對し、形相と質料が結合された場合には、形相と質料とから結果するのは實體的存在 (esse substantiale) である。扱、附帶有が基體に加はつて來た場合に、附帶的存在が結果するとはいへ、質料と實體的形相の結合から、事物がそれに於て自らによつて存立し、自らによつて一つのもの (unum) が結果するといふやうな、實體的形相と同じやうなものであると附帶有を考へることは出來ない。即ち、此の附帶有を附帶的形相 (forma accidentalis) と呼ぶならば、附帶的形相が加はつてゆく基體は、自らに於て完成した存在者 (ens in se completum) であり、自らの存在に於て存立してゐる (subsistens in suo esse) のである。此のやうに、附帶的形相に先行してゐる存在者に對して、附帶的形相が加はつて來た場合には、それに於て事物が存立し、それによつて事物が自らによる存在者となるやうな存在 (esse) が結果するのではなく、それなしにも、自存する事物が知解され得るやうな、或る二次的存在が結果するのである。従つて、附帶有と基體とからは、自らによる一つのもの (unum per se) が結果するのではなく、例へば、「白」が「白く物」を結果する如く、附帶的な一つのもの (unum per accidens) が結果するのである。此の故に、附帶有と基體の結合からは、或る本質は結果せず、附帶有は完全な本質概念を持たないし、又完全な本質の部分でもなく、附帶有が從屬的な存在者 (ens secundum quid) であるやうに、從屬的な本質 (essentia secundum quid) を持つと言はれるのである。従つて、我々が接する具體的全體である人間が、自らの中に本質的諸原理 (Principia essentialia) を持ち、且つ多くの附帶有が屬し得るとしても、人間の定義に於てはすべての附帶有は排除されるのである。^{註九}

以上に於て、附帯有と基體とから成る合成體、即ち附帯的存在と本質の問題は明らかにされた。次には、本來的な意味に於て本質を持つ、附帯有の基體となり、且つそれに先行する、實體的形相と質料とから成る合成實體、即ち實體的存在の本質について考察しなければならぬ。

註一 C. G. I, cap. 3 : principium totius scientiae quam de aliquo re ratio percipit, sit intellectus substantiae ipsius, eo quod, demonstrationis principium est quod quid est Cf. in Arist. Met., 1250~1262

註二 in Arist. Met., 1314 : Requiringur ergo quod quid erat esse propriae positionis et subiecti non est idem et unum.

註三 in Arist. Met., 1309 : Hoc enim intelligimus per quod quid erat esse alicuius, quod convenienter responderi potest ad quaestionem de eo factam per quid est.

註四 in Arist. Met., 1313 : Et ideo concludit dicens, quod haec erit ratio in singulis, quod quid erat esse, in qua ratione dicente «ipsam», idest descriptente praedicatum non interit «ipsam», idest subiectum; sicut in ratione animalis non inest homo. Unde animal pertinet ad quod quid est homo.

Cf. Ross, W. D., Aristotle's Metaphysics, Vol. II, p. 167, Oxford, 1948 : The account of the essence of a thing is the account that states its nature but does not use its name.

註五 日本語の言表形式としては「人間が中」といふのが當然であるが、此處に於て大切であるのは、主語と述語の関係に於ける「ある」といふ言表の方法であるから、特に此のやうな言表を用ひる。

註六 トマスは此の專柄を De ente et essentia cap. 7 (使用キキムトといふは註八参照)に於て次のやうに説明して居る。Unde nomina accidentalia concretiva dicta non ponuntur in praedicamento sicut species vel genera, ut album vel musicum nisi per reductionem; sed solum secundum quod in abstracto significantur, ut albedo et musica. (従つて具體的言ひ表はされた附帯的名稱は「白く物」や「音楽のあるもの」のやうに、還元たよつてなければ、種、或ひは類として範疇の中で措定されず、ただ「白々」とか「音楽」とかのやうに抽象的の意味される場合でのみ範疇の中で措定されるのであらう)

風土 in Arist. Met., 1333 以下

Cum enim quaero quid est homo, et respondetur, animal, ly animal, quia est in genere substantiae, non solum

dicat quid est homo, sed etiam absolute significat quid, id est substantiam. Sed cum quaeritur quid est albedo, et respondeatur, color, licet significat quid est albedo, non tamen absolute significat quid, sed quale. (蓋)「私が人間とは何か」と問ふ場合、「動物」と答へられるならば、その「動物」といふことは實體の範疇に属するものであるから、單に「人間が何か」を言ひ表はしてゐるのみではなく、獨立的な意味に於て「何か」を、即ち、實體「本質の意」を意味してゐる。しかしながら、「白さとは何か」が問はれた場合、「色」と答へられるならば、「白さとは何か」を意味してゐるにせよ、しかも獨立的な意味に於て「何か」を意味してゐるのではなく、「このやうであるか」を意味してゐるのである。と言つてゐる。

註七 in Arist. Met., 1324: quod quid erat esse non est omnium quae habent quaecumque rationem notificantem nomen, sed eorum solum, quorum ratio est definitio. Cf. Ross, W. D., Aristotle's Metaphysics, Z cap. 4, 1030 a 6-7: ὅτι τὸ εἶναι ἐστὶν ἕκαστου ὁ λόγος ἐστὶν ὁρισμός.

註八 Cf. De ente et essentia cap. 7 使用チキートビ。

a.) Saint Thomas d'Aquin L'Être et l'Essence, Ed. par Capelle, C. O. P., J. Vrin, Paris 1947

b.) Le "De Ente et Essentia" de St. Thomas d'Aquin, Roland-Cosselin O. P., J. Vrin, Paris 1948

c.) S. Thomae Aquinatis Opusculum De Ente et Essentia, Editio Tertia, Marietti, Roma 1948

註九 此のやうに附帶有は、本來的な意味に於ける本質からは排除されるが、附帶有は謂はば本來的な意味に於ける本質に關係を持つことによつて、存在者の概念を分有するのであるから、本質は附帶有の原因であるといふことが出来る。そして本質は實體の形相と質料との合成であるから、附帶有は主として實體の形相から結果する場合と、質料から結果する場合の二つが考へられる。所で實體の形相は、知性的精神のやうに、その存在が質料に依存しないあるものとして見出されるが、質料は形相によつてのみ存在を持つのである。従つて、實體の形相から結果する附帶有には、例へば「知解すること」のやうに、質料との共通性を持たないものもあれば、「感覺すること」のやうに、質料との共通性を持つものもある。しかし、質料から結果する附帶有は、實體の形相なしに質料から結果することはない。所で、此の質料から結果する附帶有は、種の形相に對して持つ關係と、類的形相に對して持つ關係とによつて、或る差別がある、前者は男性・女性の如きであり、後者は皮膚の色の如きがそれである。更に又、質料から結果する附帶有は個別的附帶有 (accidentia individui) であるが、同一種内の個物を區別せよ。實體の形相から結果する附帶有は、類或ひは種の固有の様態である。以上のやうに附帶有は區別される。

Cf. De ente et essentia cap. 7 及び Sum. Theol. Ia, Q. 15, Art. 3, ad. 4; Q. 29, Art. 1, Resp.; Ia IIae, Q. 18, Art.

三

合成實體とは、實體的形相と質料とから成る實體である。即ち、此のやうな實體が結果するのは、實體的形相と質料との結合によるのである。實體的形相は、それが加はつてゆくそのものなしには、自らによる獨立した存在 (*per se esse absolutum*) を持たず、又實體的形相が加はつてゆくそのもの、即ち質料も亦、自らによる獨立した存在を持つてゐない。従つて此の兩者の結合によつてはじめて、それに於て事物が自らによつて存立する存在、即ち實體的存在が結果し、又、自らによる一つのものが結果するのであり、或る本質が生ずるのである。故に、本質は實體的形相と質料とからの合成實體そのものに屬すると言ふことが出来、更に次のことが明らかにになる。即ち、質料と實體的形相の關係を本質が意味するのでもなく、又、實體的形相と質料の上に附け加へられたものでもない。何故ならば、關係によつては事物は認識されることが出来ず、又、實體的形相は質料の顯勢態であつて、形相によつて質料は顯勢態に於ける存在者となり、此の或る物となるのであつて、その時はじめて本質が生ずるのであるから。

此のやうに、合成實體の存在の原因は、質料と實體的形相となのであつて、實體的形相のみが、或ひは質料のみが此の實體的存在の本質ではない事は明らかである。トマスの例によれば、物が甘いと呼ばれるのは、甘味の原因である熱と、熱によつて分解される液體とを包括した「味」からさう呼ばれる如くである。従つて、合成實體の本質は、實體的形相と質料とを含まなければならぬのである。

扱、このやうな本質に含まれる質料は、限定された質料 (*materia signata*) のみを意味してゐる。質料は個別化 (*individuatō*) の原理であるが、例へば、「人間である限りの人間」 (*homo in quantum est homo*) の定義に於て指定される質料は、此の骨、此の肉といふやうな限定された質料ではなく、獨立的な意味での (*absolute*) 骨や肉

である。そして、ソクラステのやうに特定の人間が定義を持つとするならば、その本質に指定される質料は限定された質料である。従つて、質料が限定されてゐるか否かを除くならば、ソクラテスと人間の本質を區別することは出来ない。^{註一}トマスはこのやうに、アリストテレスの所謂第一質體と第二質體の本質について簡単に論じてゐるけれども、これが重要な意味を持つことは後に明らかにされるであらう。

以上に於て、合成質體の本質が、形相と質料とを同時に含まなければならないことは一應示されたが、トマスは更に、「本質の部分は、自然的には形相と質料とであるが、論理的には類と種差とである」と言つてゐる。^{註二}何故なら、「如何なる定義も類と種差とから成る」^{註三}からである。例へば、「人間」は「靈魂」と「肉體」の合成質體であり、その本質はその兩者を含まなければならないことは明らかになつたけれども、我々は「人間」を定義して、「理性的動物である」と言ふやうに、定義によつて事物の本質を表はし、且つ知るのであるから、形相と質料、及び兩者を含む本質と、類・種・種差等の論理的概念 (intentiones logicales) との關聯を明らかにしなければならぬ。而して、此の考察によつて、トマスが、傳統的な普遍者 (universalia) の問題に獨自の解答を與へてゐる事が明らかにされるであらう。

扱、今述べた「人間は理性的動物である」といふ例に於ては、「人間」は種であり、「動物」は類、「理性的」は種差であると言はれる。此の場合、「人間」といふ種は、「動物」といふ類を「理性的」といふ種差によつて限定することによつて得られたわけであるが、全體を構成する部分は、その全體について述語されないから、「人間」といふ一つの全體に對して、「動物」は部分といふ關係に立つのではなく「動物」といふ類の本質と、「人間」といふ種の本質は同じものでなければならず、兩者の相異はたゞ限定されてゐるかゝるないかの相異に過ぎない。どうしてこのやうに言ふことが出来るのであらうか。此のことをトマスは、動物の部分としての corpus と、類として考へられる corpus との相異を考察することによつて明らかにしてゐる。

アリストテレス的に言ふならば、自然は一般的に *corpus* であると考へられる。此の *corpus* は、その中に三次元 (*tres dimensiones*) が限定され得るといふ本性から *corpus* と呼ばれるのであるが、それはより高次の完成に進むことを排除するかしないかによつて、二様に考へることが出来る。即ち、その中に三次元が限定され得るといふ形相の上に、生命 (*vita*) とか、或ひはさういつたやうなより高次の形相が附け加へられることを排除しない場合、さういふ *corpus* は類であつて、三次元が限定され得るといふ形相に於て、任意のあらゆる形相が知解されてゐるのである。このやうに考へた場合に、動物の形相は、*corpus* の形相に於て暗に (*implicite*) 含まれてゐるのである。此の論は、トマスの形相の單一性の主張から出たものである。例へば、トマスは人間の形相は知性的靈魂 *anima intellectiva* 以外にはなすことを述べ、此の知性的靈魂といふ形相の中に、より下位の諸形相が含まれてゐると言つてゐる (Cf. *Sum. Theol. Ia, Q. 76, Art. 4*)。従つて、三次元が限定され得るといふ *corpus* の形相は、*corpus* がより上位の完成へと進むことを排除しない場合には、當然より上位の形相を暗に含むと言ふことが出来るのである。他方、*corpus* といふ名稱は、三次元を限定し得るといふ形相から、より以上の完成が結果せず、もし他の或るものが附け加へられるなら、このやうな *corpus* の意味以外のものであらうといふ風に、排除を伴つて (*cum praecisione* 自らの中に於て三次元を限定する可能性を結果するやうな形相を持つ或るもの) を意味することも出来る。此の場合には *corpus* は動物の全體を構成する質料的部分といふことになる。動物と人間との關係も、以上述べた事柄と同様に考へることが出来る。即ち、動物が他の完成を排除する場合には、動物により以上の完成が加はつて來たとしても、それは動物の概念の中に暗に含まれたものではないものとして、動物に對して部分といふ仕方で關係することになる。他方、動物が、その形相が何であれ、その形相から感覺と運動とが出て來る或るものを意味する限り、動物は類である。このやうに、類は質料のみを意味しないから、種の中にあるすべてのものを、非限定的に (*indeterminate*) 意味することになる。従つて、種差は類の中に既に非限定的に意味されてゐる形相であるから、種差も同様に種の中にあ

るすべてを意味し、單に形相のみを意味してゐない。所で、類と種差とは夫々種の全體を意味するわけであるが、その意味の仕方には差異がなければならぬ。即ち、類は事物に於ける、固有的形相による限定のない質料的なものを規定する名稱として全體を意味し、従つて、類は質料から得られるのであり、より高次の完成に對して質料的關係に立つわけであるが、種差は反對に、その第一の概念からすれば規定された質料であるといふことを除けば、限定的な形相からとられた或る限定である。そして種は此等兩者、即ち、類といふ名稱の意味する限定された質料と、種差といふ名稱の意味する限定された形相とからの合成であることになるのである。以上に於て示された如く、類は質料ではないが、全體を意味するものとして質料からとられたものであり、このやうに上位の完成の點から見れば質料的であるといふことから、種的形相の限定なしに事物の本質を表はし、種差は形相ではないが、全體を意味するものとして形相からとられたものであつて、このやうな種的形相の限定に於て成立してゐるのであるから、此の二つの概念から、種乃至定義の概念が構成されるのである。従つて、此の考察によつても、合成實體の本質が、形相と質料とから成る合成體そのものである事が知られ、更に、合成實體及びその形相と質料と、類・種差・種等の論理的概念との關聯が明らかになるのである。

このやうに、類や種差の概念は、「人間」とか「動物」とかいふやうな名稱による場合の如く、全體といふ仕方の意味されてゐる限り、個物の中にある全體を、暗に、又不分明に (*implicite et indistincte*) 含むものとして本質に合致するのであつて、例へば、「ソクラテスは理性的動物である」といふやうに、此の個物 (*hoc individuum*) に述語され得るのである。従つて、それは附帶有を排除せず、例へば、「ソクラテスは色が白い、故に人間は色が白い」といふ具合に、或るものが本質を持つてゐるものゝ概念について、附帶的に述語され得るのである。故に、プラトンのイデア論に見られる如き本質を個物の外部にありとする立場は排除されなければならない。更に、本質を固有の概念に従つて考へた場合、これは本質の獨立的な考察 (*absolute consideratio*) であるが、此の場合には、種の本質は

個別化の原理である限定された質料を排除して意味され、例へば、「人間性」(humanitas)といふ名稱で表はされる如く、人間がそれによつて人間たるところのものを意味し、このやうなものである限りの本質に合致するものを除いては、何ものもその本質に關して眞とは言はれないのであつて、あらゆる附帶有はその本質に含まれず、従つて、このやうな本質が一であるか多であるかは論ずることは出来ないのである。

以上の考察を通して、トマスは本質の存在 (esse) を三様に區別して考へてゐる事が明らかにになる。即ち、個物の中の存在 (esse in singularibus) 精神の中の存在 (esse in intellectu) 及び獨立的な意味で考へられた本質の存在 (esse) がこれである。そして此處に普遍者 (universalia) に對するトマスの解答が見られる。即ち、トマスの立場からすれば、唯名論 (nominalism) 或は概念論 (conceptualism) 又はプラトンのイデアリズムの何れも essentia としふ普遍者の一面のみをとるものであると言はなければならぬ。そして此の誤謬は、論理的概念論と存在論との混同から生じて來るものである。トマスが指摘するやうに、論理的概念と存在論上の本質との關聯は、類比的 (proportionaliter) なものであるに過ぎないのであつて、此等を混同してはならぬのである。然らばトマスの立場はどのやうに考へるべきであらうか。

トマスによれば、人間をして人間たらしめる本質は、獨立的な意味で考へられた本質 (essentia absolute considerata) である。そして此の本質は、事物の中に (in re) 存在を持つと言ふことと出來ず、又精神の中に (in intellectu) 存在を持つと言ふことも出來ない。何故なら、此の個物の中に (in hoc singulari) 存在を持つとするならば、このやうな本質は此の個物以外には存在しないことになるし、又精神の中に存在を持つとすれば、このやうな本質は概念的普遍者といふことになるが、普遍者といふ概念には、一性 (unitas) と共通性 (communitas) とが屬さねばならず、しかもこのやうな性質は、先に示された如く、獨立的に考へられた本質には合致しないのであるからである。従つて、このやうに考へられた本質は、in re に & in intellectu (従つて post rem) にも存在を持たず、寧ろそれ

以前の、謂はば超越的な存在性を持つものと言はなければならぬ。故に、それは、一應 *ante rem* に存在を持つと言ひ得るが、プラトンのイデアは否定されるが故に、全く独自の解釋を必要とするのである。

それでは、このやうな本質は何處に存在を持つと考へるべきであらうか。トマスは、「作者の心の中に存在する、何か或る作られるもの」概念は、その作られる事物の、作者の心の中に於ける或る前存在である〔*Cf. Sum. Theol. I, Q. 23, Art. 1, Resp.*〕^{註六}と言つてゐる。所で、神は世界萬物の原因であり、創造者なのであるから、「神の中には原因の中に於けるものとして、事物に於て見出される何であれ前以て存在してゐる」〔*Cf. Sum. Theol. I, Q. 57, Art. 2, ad. 2*〕^{註七}のである。従つて、此の本質は神の精神の中に (*in mente Divina*)、神の創造のはたらきに於ける世界のすべての個物の超越的原型として存在を持つと言はなければならぬ。

扱、このやうな超越的本質は、獨立的に考へられた場合には個物の中に存在を持つことは否定されるが、神の結果が個々の事物であると言はれる如く (*Cf. C. G. I, Cap. 65*)、神は事物を顯勢態に於て存在させるのであるから、この超越の本質は、神の創造のはたらきによつて被造的個物の中に多様な存在を持ち、附帯有を伴つた一つの具體的全體として自存する事物となるのである。そして、人間知性の認識は、これらの被造的個物の中から本質を抽象するのであるから、此處に於て本質は知性の中に存在を持つことになり、それは知性の外部にある個物に對して一樣の概念を持ち、個物に對してこのやうな關係に立つことによつて、知性は種概念を見出すのである。

以上の如く、トマスの立場は独自の、しかも均衡を保つた中庸の立場、或ひは綜合の立場と言ふことが出来る。このやうに合成實體の本質の考察に於て、獨立的な本質を導入することによつて普遍者 (*universalia*) の問題の含む困難の解決を試みてゐる所にも、トマスの形而上學の體系的上昇的性格が窺はれると思はれる。更に、この考察に基つて、アリストテレスの第一實體 (*πρώτη οὐσία*) と第二實體 (*δεύτερα οὐσία*) の問題のトマスの解決が得られないであらうか。それについて少し考察を試みてみよう。

アリストテレスによれば、第一實體とは個物を意味し、第二實體は類や種を指してゐる。この区分は「範疇論」(註八 11~16)及び「メタプエシカ」(1017b 23~26)等に見出されるが、此の兩者を同じ意味で實體と呼ぶことが出来るか否かは問題の存するところであつて、アリストテレスは最後の解答を與へてゐない。更に、前掲の「範疇論」及び「メタプエシカ」の区分様式には若干の差異が認められる。即ち、「範疇論」に於ては、「最も本來的に、そして第一義的に、且つ最もすぐれて語られるところの實體は、或る特定の基體に關して述べられるのでもなく、或る特定の基體の中にあるものでもないもの、例へば、或る特定の人間、または或る特定の馬の如きである。しかるにそれを種としてそれに第一に實體と言はれるものが屬する如きもの、このやうなものと此等の種の類は第二の實體と呼ばれる」(安藤氏譯による)と論じられてゐるが、「メタプエシカ」に於ては、「そこで實體といふことは二つの意味によつて語られることになる。即ち、他のものについて決して語られる(述語される)ことのない究極的基體、及び特定の或るものであつて、又分離し得るものである。そしてこのやうなものは、各事物の形態とか形相とかである」(註十)と述べられてゐる。

擬、トマスも亦、第一・第二の名稱による實體の區分を踏襲してゐるが、それは「メタプエシカ」に於ける區分様式をとり、「範疇論」に於ける様式をとつてゐる。例へば、Sum. Theol. Ia, Q. 29, Art. 2, Resp. に於て、「哲學者によれば——メタプエシカ第五卷に於て——實體は、二様に言はれる。一つの仕方では、實體は、定義が事物の本質(substantia)を意味する限り、それを定義が言ひ表はすところの事物の本質(quidditas)を意味してゐる。蓋し、ギリシア人達はこのやうな實體をウシバ(ousia)と呼んでゐるのであるが、我々は本質(essentia)と呼ぶことが出来る。他の仕方では、實體は、實體の範疇に存立するところの主體(subiectum)あるひは基體(suppositum)を意味してゐる。これは普遍的に考へれば、或る概念を言表する名辭によつて名附けられることが出来る、かくして實體は基體と呼ばれるのである。實體は更に、具體的事物(res)を意味する三つの名辭によつて名附けられる。即ち、

このやうに呼ばれた實體の三様の考察によれば、自然的事物 (res naturae)、實體 (subsistentia)、及び基礎 (hypostasis) である。蓋し、自らによつて存在し (per se existit)、他に於て (in alio) 存在しなく限り、實體 (subsistere) と言ふからである。所で、何か或る普遍的自然の下に置かれる (supponitur) 限り、自然的事物と呼ばれる、例へば、此の人間 (hic homo) が人間的自然物 (res naturae humanae) であるが如く。しかし、附帶有の下に置かれる限り、基礎或ひは實體と呼ばれるのである^{註一}と言ひ、其他 Sum. Theol., I, Q. 30, Art. 1, ad. 1; III, Q. 2, Art. 6, ad. 3 及び C. G. IV, cap. 49 等に於ても同様のことが見出されるのである。

この事實と、先の本質に關する考察を綜合して、次のやうにトマスの解答が與へられると考へられる。即ち、トマスは、第一に定義が言ひ表はす事物の本質、第二に實體の範疇に於て存立する、主體乃至基礎の二つをとりあげ、此處で定義が意味する本質が實體と言はれてゐるのは、先に述べた獨立の意味で考へられた本質が究極的な意味での實體であると考へられてゐるからであつて、類・種等の論理的概念が實體と考へられてゐるのではない。何故なら、トマスに於ては、論理的概念と存在論的本質は嚴密に區別されて居り、且又アリストテレスも示してゐるやうに、普遍的概念は自存する物ではなく、その存在を個物の中にのみ有するのであるから、アリストテレスに於ける混亂を排除して言ふならば、類・種概念としての「動物」、「人間」等は、當然實體とは言へないのであつて、トマスが「人間」と「ソクラテス」の本質は同一であると言つてゐるのは、獨立的な意味で考へられた本質が個物の中に存在を持つ (従つて精神の中に存在を持つ) か否かの相異に過ぎないといふ意味であつて、論理的種概念と存在論的個物の本質の同一性を言ふのではない。従つて種概念の指向する意味内容が、獨立的な意味で考へられた本質としての「人間」、即ち、獨立の本質の精神内存在であるならば、それは實體と言ふことが出来る。以上のやうに考へて來るならば、トマスの示した實體の二つの区分は、究極的に一つの實體、即ち超越的本質に歸することが出来るのである。

しかも人間知性にとつて、より先なるものは、感性的所與たる個物と、それから精神内に與へられる諸本質であることは言ふ迄もなく、従つて、人間知性にとつてより後なる、超越的本質への論證過程は上昇的方向をとらなければならぬのである。

註1 Cf. De et essentia cap. 2; Sum. Theol., Ia, Q. 3, Art. 3, Resp.

註2 Sum. Theol., IIa, Q. 90, Art. 2, Resp.: Partes essentiae sunt naturaliter quidem forma et materia, logice autem genus et differentia.

註3 In Arist. Met., 1327: Omnis definitio sit ex genere et differentis. Cf. Sum. Theol., Q. 3, Art. 5, Resp.; C. G. I, cap. 25.

註4 corpus は「物體」或は「肉體」等と譯されてゐるが、日本語の持つ限定的な意味は、此處に於て論ぜられぬ corpus の譯語として不適當であり、又其他適當なる譯語を選定し難いので原語の # 1 用ひる。

註5 種差は基礎との結合を排除したから、「理性的なるもの」といふ仕方であり、存在的に見出される。

註6 Ratio alicuius fundi in mente actionis existens est quaedam praecoxistentia rei fundae in eo.
註7 In Deo praecoxistit ut in causa quiddam in rebus inventur.

Cf. Sum. Theol., Ia IIae, Q. 61, Art. 5, Resp.: Oportet quod exemplar humanae virtutis in Deo praecoxistit, sicut et in eo praecoxistunt omnium rerum rationes.

註8 Aristotelis Categoriae et Liber de Interpretatione, recognovit brevique adnotatione critica instructi, L. Minio-Paluello, Oxford 1949

註9 *Ὁὐσία ἐστὶ ἐστὶν ἡ κρυπτοῦνταί τε καὶ παύσας καὶ μάλιστα λεγομένη, ἣ μῆτε καθ' ἑνοκεκμημένον τινος λέγεται μῆτε ἐν ἑνοκεκμημένῳ τινὲ ἐστὶν, οἷον ὁ τῆς ἀνθρώπου ἢ ὁ τῆς ἑρμού. δευτέρως δὲ οὐκ αὐτὰ λέγονται, ἐν οἷς εἶδεναι αἱ παύσας οὐκ αὐτὰ λέγουσιναι ὑπάρχουσιν, ταύτῃ τε καὶ τῶν εἰδῶν τούτων γένει.*

註10 *σφαιρίσει δὴ καὶ ἄλλο τίνος τίνος ὁὐκ αὐτὰ λέγεται, τὸ θ' ὑποκειμένου ἐστίν, ὃ μῆτε κατ' ἄλλο λέγεται, καὶ ὃ ἀν τὸδε τι ὄν καὶ ὑποστῶν ἢ τούτου δὲ ἐκείνου ἢ μῆτε καὶ τὸ εἶδος.*

註11 *Secundum Philosophum, in V Metaphys., substantia dicitur dupliciter. Uno modo dicitur substantia quidditas rei,*

quam significat definitio, secundum quod definitio significat substantiam rei; quam quidem substantiam Graeci usiam vocant, quod nos essentialiam dicere possumus. — Alio modo dicitur substantia subiectum vel suppositum quod subsistit in genere substantiae. Et hoc quidem, communiter accipiendo, nominari potest et nomina significante intentionem: et sic dicitur suppositum. Nominatur etiam tribus nominibus significatibus rem, quae quidem sunt res naturae, subsistentia et hypostasis, secundum triplicem considerationem substantiae sic dictae. Secundum enim quod per se existit et non in alio, vocatur substantia; illa enim subsistere dicimus, quae non in alio, sed in se existunt. Secundum vero quod supponitur alicui naturae communi, sic dicitur res naturae; sicut hic homo est res naturae humanae. Secundum vero quod supponitur accidentibus, dicitur hypostasis vel substantia.

四

これ迄我々は、合成實體の本質について考察を進めて来た。所で、アリストテレスにとつては、「或るものゝ何であるかといふことを明らかにするものゝ又或るものゝ存在するかどうかといふことを明らかにするものゝ、同一の思维に屬する」(Cf. Met. E cap. 1, 1025b 17~18)^{#1}ことであつた。此のアリストテレスの考へに、「一應存在 (*etwa*, esse) と本質 (*ousia*, essentia) の區分が認められるけれども、寧ろアリストテレスにあつては、事物の本質を明らかにすることは、同時にその存在をも決定することになるのであつて、存在と本質についての精細なる考察は見出されないのである。これはアリストテレスの存在論の限界を示すものではないであらうか。

トマスはこの點に於て、明らかにアリストテレスを超えてゐる。トマスは「如何なる本質も、その存在について何か或るものが知解されることなしに知解されることが出来る。…故に、その本質が、自分自身の存在そのものである何か或るものが恐らくあるであらうといふことを除けば、存在は本質とは別のものであることは明らかである」(De ente et essentia cap. 5)^{#11}と云ひて居り、このことから分るやうに、事物の存在と本質とを明瞭に區別してゐる。

る。即ち、合成實體は、或る本質を持つて存在してゐる存在者(ens)であるから、我々の存在者に對する問ひは、單に「何であるか」(quid est?)に止まらず、その存在してゐる事實への問ひに進まなければならないのである。それではトマスは合成實體の esse を如何なるものと考へてゐるであらうか。

事物が存在者(ens)と呼ばれるのは、それが存在してゐることによつて、即ち、存在(esse)を持つことによつてである。所で、存在者は常に或る本質を持つて存在してゐる。従つて、存在は事物の本質が存在するはたらき、換言すれば、存在は本質に對して、顯勢態(actus)と潜勢態(Potentia)の關係に立つものと考へることが出来る。

扱、合成實體は、實體的形相と質料との合成であり、實體的形相と質料の關係は、顯勢態と潜勢態の關係である。従つて、實體的形相は端的な意味に於て存在を與へると考へられ、存在は實體的形相の第一の結果であると考へられる。故に、實體的形相こそ存在の原理であり、存在そのものではないであらうか。しかし、トマスは形相と存在に明瞭な區別を與へる。即ち、合成實體の形相は、確に顯勢態として潜勢態にある質料を現實にあらしめるものではあるが、その形相はそれ自身だけでは獨立的な存在を持つてはゐない。即ち、質料を必然的に豫想するのである。勿論質料は、顯勢態である形相なしには純粹な潜勢態に留まり、存在を持つてはゐない。従つて、合成實體に於ては、形相と質料との結合によつて、はじめてそれに於て事物がそれ自身だけで存立する存在、換言すれば、自らに依る、或る一つのものが結果して來るのである。故に、或る存在する事物の形相のみ、或ひは質料のみが存在であると言ふことが出来ないことは、丁度、或る事物の形相のみ、或ひは質料のみが本質と言ふことが出来ないやうなものである。存在は形相と質料とを同時に含む本質全體の顯勢態であると言はなければならぬ。顯勢態といふ點からするならば、形相は存在に對して類比的に考へられ得るのであつて、合成實體に於ては、形相は存在の原理であり、形相は「事物がそれによつてあるもの」(quo est)と言ふことが出来るが、形相と存在との違ひは、「光」と「光つてゐること」、「白さ」と「白い物であること」の違ひのやうなものである。

以上の考察から明らかなやうに、合成實體に於ては、顯勢態と潜勢態の關係は、二重の構成をなしてゐる。即ち、第一には、形相と質料の間にそれは見出され、形相は存在の原理として「事物がそれによつてあるもの」(quo set)と呼ばれ得る。そして形相と質料とから結果する本質は「事物が何かであるもの」(quod est)である。第二には、本質と存在の間にそれは見出され、本質は「事物が何かであるもの」(quod set)であり、存在は「事物がそれによつてあるところのもの」(quo est)なのである。^{註三}此の顯勢態と潜勢態の關係の二重の構成を明らかにしなかつた所にアリストテレスの限界が見出されたのである。

このやうに、合成實體に於ては、形相と質料とを含む本質と、その顯勢態である存在とは區別され、顯勢態として存在は本質に先行すると言はなければならぬ。しかしながら、本質の概念に屬さないものは附帶有であると考へられるならば、存在も亦附帶有に過ぎないのではないであらうか。又、「本質とはそれによつて事物が存在者と言はれるものである」と言ふ意味は何處にあるのであらうか。

トマスによれば、此の問題は既にアヴィチェンナ (Avicenna) によつて指摘され、アヴィチェンナは存在は本質に附加されたもの (additum) と考へてゐたといふ (Cf. in Arist. Met., 556)。これに對するトマスの答へは先に述べられた合成實體に於ける存在と本質の關係から明らかであらう。即ち、合成實體に於て、顯勢態である實體の形相と、潜勢態である質料とが何れもそれのみでは獨立的に存在を持たず、謂はば相互規定的であつたやうに、合成實體の本質と存在の兩者は、夫々潜勢態、顯勢態にあるものとして相互規定的であり、現實に存在する合成實體として、即ち存在者となる爲には此の兩者が謂はば原理的なるものとして要請されるのであつて、その故に、潜勢態である本質の概念に屬さぬとしても、その顯勢態である存在は附帶有と言ふことは出來ず、又、相互規定的なものである以上、本質がそれによつて事物が存在者と言はれるものといふことも可能なのである (Cf. in Arist. Met., 558)。^{註五}

更に考察を進めるならば、このやうな問題こそ、トマスにとつて、その形而上學的思惟を更に上昇させ、超越的展

望を開かせる糸口ともなるべきものであつたと言ふことが出来る。かの超越的本質が、個物の中に、或ひは精神の中に存在を持つとき、多くの附帶有を伴ひ得たやうに、存在も被造的存在者の存在としてあらはれる時、それは受取られたもの (receptum) であり、本質の個別化の様相に應じて個別化され多様化された存在である。即ち、トマスは *De ente et essentia cap. 6* に於て、「本質は質料と形相とからの合成實體の中に見出される。それらに於ては、存在を他から持つといふことの爲に、存在は受取られたものであり、且つ制限されたものである。更に、それらの本質は限定的質料の中に受取られたのである」と言つてをり、更に又、*Sum. Theol., I, Q. 3, Art. 5, Resp.* に於て「二つの類の中にあるすべてのものは、類の本質に於て共通してゐる。その本質は、本質なるが故に、それらに述語される。しかし、それらは存在に關しては異つてゐる。蓋し、『人間』と『馬』の存在は同じものではなく、又『此の人間』と『かの人間』の存在も同じものではない。このやうに、類の中にある如何なるものも、それらの存在と本質とは異つてゐなければならぬ」と言つてゐる。それではこのやうな存在の多様化は如何にして生ずるのであらうか。それは當然、存在を受け取るものに求めなければならぬ。故に、種的存在の多様性を生ずる原理は種差に、個物的存在の多様性を生ずる原理は限定的質料に求めることが出来よう。換言すれば、本論三で明らかにされた本質の相異に求むべきであらう。

扱、更に、感性的實體の本質は質料を含むから生成變化を持ち、従つて、我々にとつて存在は附帶の様相を伴つて解せられる。しかし、本質が存在を受取るといふことは、存在を與へる他者を豫想させる。更に、本質は「それによつて事物が固有の類、又は種の中に配置されるもの」であり、又「それによつて、それに於て事物が存在を持つ限りさう呼ばれる」のであつて、存在はそれによつて事物が現實の秩序に於て、自らによつて存在する存在者たるを得るものであり、故に本質の顯勢態といはれるのである。しかし、このやうな本質と存在の區別とその關係は、兩者の自然學的な區別を示すものではなく、あくまでも形而上學的な區別を示すものであつて、本質と存在とが如何にして結

合するかは、我々は神の創造の結果のみを知り得るのであるから、形相と質料の結合の場合と同じく我々にとつては不可知なのである。^{註十}

扱、このやうに我々は合成實體に關する考察を進めて、最後に存在と本質の區別に至つた。トマスは「顯勢態と潛勢態の合成は、形相と質料の合成よりもより根本的である」^{註十一}と言つてゐる。合成實體は質料を含み、且つその本質と存在が區別される故に、先に明らかにされた如く顯勢態と潛勢態の二重の構成が見出された。此處に至つてトマスは我々をより高次な實體の考察へと決定的に導くのである。即ち、第一には、本質が質料を含まず、しかも存在を他から受取る存在者（天使）なる單純實體（*substantia simplex*）である。従つて、單純實體は形相と存在から合成され、形相はいはば同語異義的に（*aequivoco*）潛勢態となり、顯勢態と潛勢態の構成は一重となる。更に、最後に、此の顯勢態と潛勢態の合成が解消する、即ち、その本質と存在が全く一致するところの、純粹顯勢態（*actus purus*）である神の存在に迄導くのである。^{註十二}

註一 *ὅτι τὸ τῆς αὐτοῦ εἴδει διαφοράς τὸ τε εἶναι ὁμοῦν ποσῶν καὶ εἶναι*

註二 *Omnis autem essentia vel quidditas potest intelligi sine hoc quod aliquid intelligatur de esse suo : . . . Ergo patet quod esse est aliud ab essentia vel quidditate, nisi forte sit aliqua res cuius quidditas sit ipsum esse : . . .*

註三 *Cf. C. G. II, cap. 54 : De ente et essentia capp. 5-7*

註四 *De ente et essentia cap. 2 : essentia autem est secundum quam res esse dicitur ibid. : essentia qua res denominatur ens*

殆んど数字を隔てたのみで書かれた此の二様の表現は、一應表現の變化に過ぎないとも言ひ得るが、私はこれを三つの仕方で解釋してみたい。

先づ第一には、*dicitur, denominatur* といふ言ひ方から解釋を進めてゆくと、既にこれ迄の考察に於て示されたやうに、私の存在論的思惟は、必然的に論理的概念と聯關を持ち、従つて、言表の形式と密接なつながりを持つのである。従つて、我は事物について、類及び種差を述語し、換言すれば本質を述語することによつて、「何々である」といふ言表の形式をとるの

である。我々は事物について、その本質の認識を究極のものとするから、此のやうな本質の述語づけをもつて、事物を存在者と名付け或ひは呼ぶのである。以上のやうに言表の形式との聯関に於くとらへるならば、in Arist. Met. に於て、アリストテレスにそのまゝ從ひ、essentia を quo est とつてゐる（2卷註解参照）ことの解決も可能なものではなからであらうか。

第二には、續いて明らかたされる如く、顯勢態とつての esse と潜勢態とつての essentia の相互規定性から解釋することが出来る。

第三には、アトキスには特色ある超越的本質の考へがあるといふことから解釋することが出来る。先に（本論三）明らかたされたやうに、超越的本質は神の精神の中であり、神に於ける原理と考へられるのであるから、當然事物の存在原理と言ひ得るわけである。しかこのやうな本質は我々にとつては知解出来ず、我々が存在と區別される本質と言ふのとは異なるものであることは既に述べられた。

註五 Esse enim rei granvis sit aliud ab eius essentia, non tamen est intelligendum quod sit aliquod superadditum ad modum accidentis, sed quasi constituitur per principia essentiae. Et ideo hoc nomen Ens quod imponitur ab ipso esse, significat idem cum nomine quod imponitur ab ipsa essentia.

註六 …essentia invenitur in substantiis compositis ex materia et forma, in quibus et esse est receptum et finitum, propter hoc quod et ab alio esse habent: et iterum natura vel quidditas earum est recepta in materia signata.

註七 …omnia quae sunt in genere uno, communicant in quidditate vel essentia generis, quod praedicatur de eis in eo quod quid est. Differunt autem secundum esse: non enim idem est esse hominis et equi, nec huius hominis et illius hominis. Et sic oportet quod quaecumque sunt in genere, differant in eis esse et quod quid est, idest essentia.

註八 De ente et essentia cap. I: …per quod res constituitur in proprio genere vel specie, …

註九 ibid.: …essentia dicitur secundum quod per eam et in ea ens habet esse: …

註十 Cf. Copleston, F., A History of Philosophy, Vol. II, p. 333, Burns Oates & Washburne, London 1950

註十一 Cf. C. G. cap. 54: Sic igitur patet quod compositio actus et potentiae est in plus quam compositio formae et materiae. Unde materia et forma dividunt substantiam naturalem: potentia autem et actus dividunt ens commune.

註十二 此のやうにアトキス自身の言葉、例へば、前註に述べた言葉、或はは in Arist. Met., 1285-1290 に於て、運動の原因としての神の存在證明の方法を形而上學的思惟から斥け、自然學に屬せしめること等から考へてアトキスの神の存在の正

この證明の中で、此の存在論からする證明が中心的地位を占めると言はなければならぬ。 Cf. Coplston, F., 前掲書 pp. 337
 ~346; Gilson, E., Le Thomisme chap. II pp. 88~114, J. Vrin, Paris 1948; L'Esprit de la Philosophie Médiévale,
 chap. III, J. Vrin, Paris 1948

扱、我々は本論一に於て、トマスの形而上學の根本的性格を、啓示神學の領域設定の問題、及び、形而上學の主題の問題の二點から、上昇的と規定した。而して、その出發點となる、我々にとつてより先なる存在者たる、合成實體について考察を進め、最後に存在と本質の區別に至り、この區別から更により高次の實體へと導びかれる端緒を與へられることを明らかにすることによつて、トマスの形而上學の上昇的性格を一層明らかにし得たと考へられるのである。しかし、合成實體の存在と本質に關して、本稿に於て未だ論じ盡くされてゐない問題も多く、又其他の點についても、更に検討を要する問題もあると考へられるが、一つの試論として、本稿の期する所は略、示され得たと思ふ。(完)

(筆者 京都大學文學部「哲學」大學院學生)

前 號 目 次

懷疑の克服……………	長澤信壽
——聖アウグスティヌス研究 小序——	
ハイデッガーに於ける 『存在』と『無』の問題……………	田中加夫
トマス・アケイナスの 形而上學研究……………	宮地 宏
——合成實體の存在と本質について——	

ENGLISH OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

‘*Esse*’ and ‘*Essentia*’ of Composite Substances in the Metaphysics of St. Thomas Aquinas

by Hiroshi Miyaji

The revival of the ancient Aristotelian tradition through the Metaphysics of S. Thomas Aquinas, in the course of the 13th Century, proved to be a remarkable achievement of S. Thomas’ genius. This enabled him to build up a powerful system which gave an answer to quite a number of ‘*aporiae*’ left unsolved by Aristotle himself.

First of all, S. Thomas gave his own answer to the ‘*aporia*’ concerning the notorious ambiguity of the Aristotelian conception of First Philosophy or Metaphysics by making a clear-cut distinction between the field of ‘*theologia revelationis*’ and the proper realm of ‘*theologia naturalis*’.

The metaphysical system of S. Thomas is so built that it might be fundamentally characterized as a kind of hierarchical order starting from a lower grade of substances to reach a higher one. The human intellect considers first the sensible substances, which are closer to our knowledge, and, from them, passes to the cognition of the existence of God, who is the highest of all substances and consequently the most intelligible in itself although far remote from our human knowledge.

The purpose of this paper is to examine and to restate the metaphysical value of this systematic construction, especially as regards the following points :

1—The twofold reciprocal similarities of *actus* and *potentia*, as found in *substantiae compositae sensibiles*, i. e. of *forma substantialis* and *materia*, and of *esse* and *essentia*.

2—The answers given by S. Thomas to the traditional problems concerning the *universalia* and the distinction between the first and second substances. The key of the solution has been looked for in what S. Thomas calls *essentia absolute considerata*, which is interpreted in this paper as being the original idea of creation such as it exists in the Divine mind.

(*B. A. thesis presented in 1952*)